

Super English Language High School

2

『英語で議論できる効果的な発信能力を育成するための
ステップアップ・プログラムの研究開発』

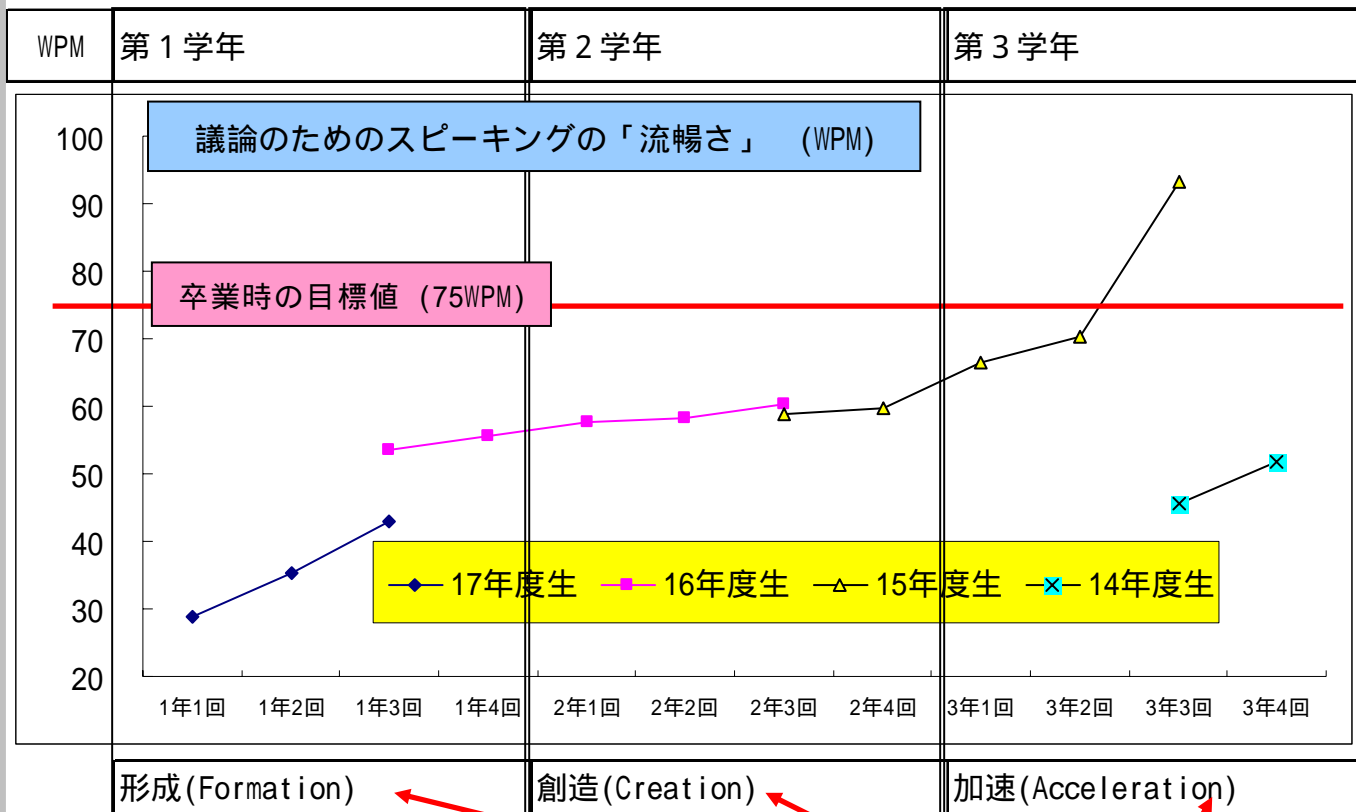
平成17年度（第2年次）

スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール

研究開発実施報告書 広島市立舟入高等学校

『英語で議論できる効果的な発信能力を育成するための
ステップアップ・プログラムの研究開発』

【研究実践と評価の対応図】



型	スキル・課題	形態	内容の例	負荷の調節	負荷	目標値																						
						1学年次 (FORMATION)			2学年次 (CREATION)			3学年次 (ACCELERATION)																
						1年	2年	3年	英語 3単位	オーラル 2単位	総合英語 2単位	英語 3単位	英語表現 2単位	英文化理解 2単位	英語理解 3単位	総合英語 2単位	エッセイ 1単位	通訳演習 2単位	英語表現 2単位	時事英語 2単位								
スピーキング型	音読	個人	斉誦(コーラス)	流暢さ ・声の大きさ ・発音の正確さ ・素材文(語彙・文法の複雑さ)	流暢さ	120 wpm	140 wpm	160 wpm																				
			復誦(リピート)																									
			追誦(シャドウ)																									
		ペア・グループ	独誦(パス)																									
			大声(ラウド)																									
			囁き(ウィスパー)																									
暗誦	個人	斉誦(コーラス)	流暢さ ・声の大きさ ・発音の正確さ ・素材文(語彙・文法の複雑さ)	流暢さ	80 wpm	90wpm	100 wpm																					
		復誦(リピート)																										
		追誦(シャドウ)																										
ペア・グループ	独誦(パス)																											
	ニュース・キャスター																											
	リード&ルックアップ																											
即興	個人	通訳・説明(インタプリット)	継続時間 トピック	継続時間	2分	3分	4分																					
		独白(モノログ)																										
		通訳・説明(インタプリット)																										
イベント型	表現を充実させる	個人	個人学習ソフト	課題の量	課題の量	リスニング 800問	リスニング 800問	リスニング 800問																				
			「書く」			ライティング	語数 ・制限時間	300語	500語	1000語																		
			「書く」から「話す」へ			個人	スピーチ	流暢さ ・発表時間 ・語数 ・トピック ・製作期間(時間)	90 wpm	100 wpm	110 wpm																	
						ペア・グループ	トークン・マッチ	流暢さ ・討論時間 ・トピック	60 wpm	70 wpm	75 wpm																	
			「論証する」			グループ	プレゼンテーション	流暢さ ・トピック																				
グループ	ディベート	流暢さ ・トピック		60 wpm	70 wpm	75 wpm																						
	グループ	ディスカッション	流暢さ ・トピック																									

CONTENTS

報告書編

1	研究開発実施期間	…	6
2	研究開発課題	…	6
3	研究開発課題の設定理由	…	6
4	今年度の「研究計画」とこれまでの研究開発の「概要」	…	7
	(1) 第二年次(平成17年度)研究計画		7
	(2) 第二年次(平成17年度)研究計画の詳細		7
	(3) 第一年次と第二年次の研究開発の「概要」		9
5	研究開発の内容と評価	…	14
	(0) 本年度研究開発の前提となること		
	(1) S.U.P. Version 2		14
	(2) S.U.P. Version 2 の英語の4技能における位置づけ		15
	(3) 「負荷」の調節		16
	(4) 学習活動の2分類化		17
	(5) スモール・ステップでアップする		18
	(6) 「議論するための発信能力」をどう評価するか		19
	(1) ライティングからスピーキングへの移行を図る指導法の研究		
	(1) ライティングとスピーキングの基礎となる時期の指導		27
	(2) ライティングとスピーキングの相乗効果による発展のための指導		34
	(2) スピーキングから議論活動への移行を図る指導法の研究		
	(1) 「議論」に基づいたスピーキングのステップアップのための指導		39
	(3) 指導評価シラバスの開発		
	(1) 目標値の達成度		47
	(2) 目標の達成度から考慮すべきシラバスの改善点		47
6	生徒の英語コミュニケーション能力の向上と評価	…	48
	(1) 「議論するための発信能力」について		
	- WSA テスト(本校独自開発)に基づく「パフォーマンスの変化」 -		
	(1) 「議論するための発信能力」の定義と評価		48
	(2) 議論するための「流暢さ」の変化		48
	(3) 議論するための「正確さ」の変化		48
	(4) 議論するための「適切さ」の変化		51
	(5) 議論するための「総合指数」の変化		51
	(2) その他の外部指標に基づく評価		
	(1) 実用英語技能検定の SELHi 研究における位置づけとこれに基づく評価		54
	(2) GTEC for Students の研究における位置づけとこれに基づく評価		56
	(3) 大学入試センター試験に基づく評価		61
7	校内の英語教育の改善状況	…	62
8	研究開発組織	…	63
9	外部講師の講演・授業外活動の記録	…	73
10	今後の研究計画	…	74

資料編

資料1	シラバス(研究対象の部分のみ)	…	80
資料2	SELHi 研究開発成果中間報告会の公開研究授業指導案	…	111
資料3	授業外活動の記録	…	134
資料4	SELHi 研究開発における評価・測定の計画(第3案)	…	144
特別付録	モノログ・ペアワーク用の『ワード・カウンター』		うら表紙

平成17年度 広島市立舟入高等学校 スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール 研究開発実施報告書

- 1 研究開発実施期間 平成 16 年度 ~ 平成 18 年度 (第 2 年次)
- 2 研究開発課題 『英語で議論できる効果的な発信能力を育成するための
ステップアップ・プログラムの研究開発』
- 3 研究開発課題の設定理由

(1) 本校の英語教育のねらい

広島市は、人類最初の被爆地としての教訓をもとに、平和の願いを世界に発信できる人材の育成を目指している。本校では、国際理解教育の充実を教育目標として掲げ、普通科・国際コミュニケーションコース(以下、「国際コース」)を設置している。この国際コースでは、英語を使用して国際的な意志疎通の場面で将来活躍できるレベルの発信能力を持つ生徒の育成を最終的な目標として、英語教育の充実に取り組んでいる。

(2) 英語の実践的コミュニケーション能力における生徒の現状と特性

本校に入学する生徒は、一般的に本校の英語教育に強い期待を抱いている。とりわけ「国際コース」に属する生徒は、英語学習に対して極めて強い興味・関心を示しており、外国語系大学への進学など、英語学習への積極性を裏付ける進路実績も実現している。

一方、卒業時点で本校の「国際コース」が目標としている英語力、「国際的な意志疎通の場面で将来活躍できるレベル」と比較した場合、第三学年2学期の時点で、「ディベートやディスカッションにおいて、「留学生と流暢かつ適切に議論できる程度」の発信能力を必ずしも全ての生徒が達成してはいない」という実態がある。

この現状に至る生徒の傾向として、「ライティング能力」においては、第三学年で、九割以上の生徒が、2000語レベルの英文を論理的に書けるという「強み」がある。その一方で、「スピーキング能力」においては、第二学年で、(ア)インプットの不足により、発信のために使用可能な表現が十分備わっていない、(イ)使用可能な表現は持っているが、その処理能力が不足しており、適切な表現形態に結びつかないという個人差が混在しており、双方に対処する指導が必要である。また第三学年では、日常の出来事や自分の経験を述べることはできるが、議論ではその能力が発揮しきれないとの実態がある(平成15年度、校内研究授業の研究協議より)。

(3) 「国際コース」の生徒の現状を改善するための「課題と解決策」

「国際コース」における生徒の現状と特性を考慮し、生徒の「ライティング能力」における「強み」を生かし、これを「スピーキング能力」へと移行・一般化させるための段階的な指導が有効と考えられる。また、そこで培った「スピーキング能力」を「議論できる発信能力」へとさらに高めるための段階的な指導、いわば「ステップアップさせるプログラム」とそれを含む教育課程の系統化が必要である。詳しくは、以下の通りである。

(1) 「ライティング能力・スピーキング能力」に関して、現状における(ア)及び(イ)の状態から「インプットした表現を、ライティングだけでなく、スピーキングにも素早く使用できるレベル」まで高める。そのため、(ア)にはインプット練習のソフト開発、(イ)にはコンピュータを通じた「チャット」など、移行過程をわかりやすくする工夫をし、各指導方法の関連性や有効度の検証を通して、段階的な指導の方途を構築する。

(2) いわゆる「議論するための能力」の開発に関して、上記(1)に続いて、「意図した表現が素早く出てくるレベル」から「活発な議論ができるレベル」まで高める。そのために一方向だけでなく双方向の議論において論拠を有効に発信できるよう、クリティカル・リスニングやトーキング・マッチなど移行過程をわかりやすくする工夫をし、各指導方法の関連性や有効度の検証を通して、段階的な指導の方途を構築する。

(3) 「指導評価シラバス」に関して、「本校の英語教育のねらい」の達成に向け、上記(1)、(2)の指導方法を位置づけ、科目間の系統性がはっきりとした指導評価シラバスを作成する。

(4) 展望

本指定では、上記(1)、(2)、及び(3)を取り上げて、研究開発を行い、「英語圏からの留学生と流暢かつ適切に議論できる程度の英語力」を育成する。また、研究開発によって得られた知見を本校の普通科・普通に通ずるとともに、各種研究会での発表、学会誌への投稿を行うなど、逐次普及に努める。

4 今年度の「研究計画」とこれまでの研究開発の「概要」

(1) 第二年次(平成17年度)研究計画

「実践的研究の期間」と位置づけて、段階的な指導の実践、及び評価の実践をする。

1. 「ライティングからスピーキングへの段階的な指導」及び、「スピーキングから議論活動への段階的な指導」に関して
 - 指導計画に基づいて、指導を実践する
 - 学期ごとに、各能力(WSAテスト他)の測定・評価をする
 - 測定・評価の結果を統計処理し、指導法の適否を検証・検討する
 - 上記の結果に基づいて、指導計画の修正と精緻化をするとともに、第三年次への課題を整理する
2. 「評価の実践」に関して
 - 評価規準(総合的・科目ごと)に基づく教師による指導と生徒による自己評価を実践する
 - 上記の評価に基づいて、科目ごとのシラバスの目標への適合度を検証・検討する
 - 上記の結果に基づいて、シラバスと評価規準の改善をするとともに、第三年次への課題を整理する

(2) 第二年次(平成17年度)研究計画の詳細

平成17年度の研究計画 第二年次		
研究内容	研究方法	研究評価方法
(1)ライティングからスピーキングへの移行を図る指導法の研究	主に1・2年生を対象として、指導計画に基づく指導を実践する	生徒及び教師による、指導・活動の自己評価と内省の報告
	1) 「ステップアップ・プログラム」の指導内容を「イベント型」と「トレーニング型」に分類し、新たにステップ化する 2) 各型の活動を年間のシラバスに位置づけて指導する <u>とくに「ライティング活動」と「スピーキング活動」の両方とも、「単なる模倣・反復」から「即興的・創造的な産出」へと繋げることを強く意図してステップ化し、指導する</u>	
	学期ごとに、各能力の測定・評価をする	生徒及び教師による、指導・活動の自己評価と内省の報告
	測定・評価の結果に基づき、指導法の適否を検討する	指導に因る生徒のパフォーマンス(身近だが賛否両論のあるテーマについて「話すこと」と「書くこと」における「流暢さ・正確さ・内容の適切さ」)の変化 英語学習に関する態度の変化
	上記(1)の結果に基づいて、指導計画の修正と精緻化をするとともに、課題を整理し、指導計画を改善して指導を行う。	指導に因る生徒のパフォーマンス(身近だが賛否両論のあるテーマについて「話すこと」と「書くこと」における「流暢さ・正確さ・内容の適切さ」)の変化 「ステップアップ・プログラム」と、それに関連する教材・装置の完成度

(2)スピーキングから議論活動への移行を図る指導法の研究	主に3年生を対象として、指導計画に基づく指導を実践する 1) 「ステップアップ・プログラム」の指導内容を「イベント型」と「トレーニング型」に分類し、新たにステップ化する 2) 各型の活動を年間のシラバスに位置づけて指導する <u>とくに「スピーキング」における「流暢さ」のパフォーマンスの向上を強く意図してステップ化し、指導する</u>	生徒及び教師による、指導・活動の自己評価と内省の報告
	学期ごとに、各能力の測定・評価をする	生徒及び教師による、指導・活動の自己評価と内省の報告
	測定・評価の結果に基づき、指導法の適否を検討する	指導に因る生徒のパフォーマンス(身近だが賛否両論のあるテーマについて「話すこと」と「書くこと」における「流暢さ・正確さ・内容の適切さ」)の変化 英語学習に関する態度の変化
	上記(2)の結果に基づいて、指導計画の修正と精緻化をするとともに、課題を整理し、指導計画を改善して指導を行う	指導に因る生徒のパフォーマンス(身近だが賛否両論のあるテーマについて「話すこと」と「書くこと」における「流暢さ・正確さ・内容の適切さ」)の変化 「ステップアップ・プログラム」と、それに関連する教材・装置の完成度
(3)指導評価シラバスの開発	評価規準(総合的・科目ごと)に基づく教師による指導と生徒による自己評価を実践する	科目ごとのシラバスの目標に対する適合度
	上記(3)に基づいて、科目ごとのシラバスの目標への適合度を検証・検討する	
	上記(3)に基づいて、シラバスと評価規準の改善をする	研究の第3年次の指導の成果(生徒のパフォーマンスの変化) 体系的な指導・評価シラバスの完成度

(3) 第一年次(平成16年度)と第二年次(平成17年度)の研究開発の「概要」

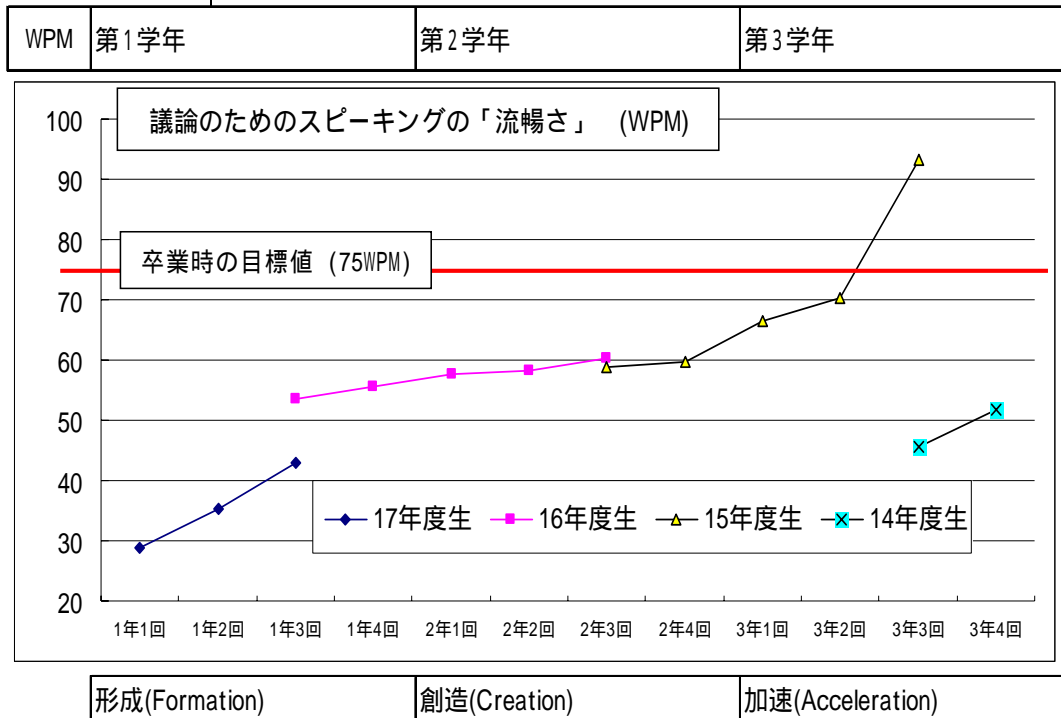
第一年次		
研究内容	研究方法	成果
(1)ライティングからスピーキングへの移行を図る指導法の研究	指導に関する理論的背景を整理する	<p>「ステップアップ・プログラム」の発達観・指導観の概念図の作成をした。本校の英語の教育課程を系統化する目安として、発達観に基づく目標、「使用可能な表現の充実から思考力とコミュニケーション能力の調和へ」を設定した。また、育成すべきコミュニケーション能力である「英語で議論できる発信能力」を把握する指標として、「流暢さ」・「正確さ」・「内容の適切さ」の3つを取り扱うこととした。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>図1. 本校の教育課程における「効果的な発信の能力」の発達観</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>図2. 領域における各指導の位置づけ</p> </div> </div>
指導段階ごとの指導計画の作成		上記(1)の に基づき指導内容の概念図の作成をした。「ステップアップ・プログラム」の指導内容の概念図の第1案を作成し、これに沿って授業を行った。
指導の補助となるコンピュータソフトの開発と活用をする		広島市立大学の「英語インプット学習プログラム」を導入して、1・2学年の授業および課外で活用した。 〔結果〕 学習の手段として、生徒からの評価はやや肯定的(肯定率53%)。教育活動の限られた時間にどう位置づけるかが今後の課題。
各段階の指導(コンピュータソフトの活用含む)を実施し、その適否を検証・検討する		「ステップアップ・プログラム」の指導段階(ステップ1～6)を実施した。 〔結果〕 生徒の内省:すべてのステップにおいて意図したスキルに肯定的な評価。とくにライティング活動は「論理的に書くよい練習になった」の肯定率(88%)。WSA テスト(11月実施):スピーキングの「流暢さ」、1年生 53.5wpm、2年生 58.9wpm。
次年度への展望を検討する		上記(1)の に基づいて反省を加え、「ステップアップ・プログラム」の内容を「イベント型」と「トレーニング型」に分けて再構築するとともにシラバスに位置づけて指導する。
(2)スピーキングから議論活動への移行を図る指導法の研究	指導に関する理論的背景を整理する	上記(1)の に同じ。
指導段階ごとの指導計画を作成する		上記(1)の に同じ。
各段階の指導を実施し、その適否を検証・検討する		「ステップアップ・プログラム」の指導段階(ステップ5～11)を実施した。 〔結果〕 「練習量と時間はもっと多く」、「論題は易しめのほうがよい」と要改善。WSA テスト(10月実施):スピーキングの「流暢さ」、3年生 45.5wpm。
次年度への展望を検討する		上記(2)の に基づいて反省を加え、「ステップアップ・プログラム」の内容を「イベント型」と「トレーニング型」に分けて再構築するとともにシラバスに位置づけて指導する。

<p>(3)「ライティング能力」、「スピーキング能力」、「議論能力」、英語コミュニケーションへの積極性などの「周辺的能力」の評価方法の開発</p>	<p>能力評価の指標を整理する</p>	<p>WSAテスト(Writing and Speaking test for Argumentation)の開発 「議論するための能力」の定義と評価の指標：本研究で主眼とすべき「議論するための能力」は、「身近だが賛否両論のあるテーマ」について自分の考えを論理的に「書く力(ライティング)」と「話す力(スピーキング)」と定義した。また、評価の指標は、「流暢さ(一定時間内の産出語数)」、「正確さ(綴りあるいは発音・文法の誤率)」、「内容の適切さ(論拠の確かさ)」の3点について、ライティングとスピーキングそれぞれについて測定。</p> <p>英語学習リサーチの作成 英語コミュニケーション能力の獲得に対する意識・態度の測定：生徒の意識・態度は、英語コミュニケーション能力の獲得に影響を持つと考え、いわゆる「周辺的な能力」としてこれを調査・分析した。測定の指標は、英語コミュニケーションにおける4技能ごとの「有用性の認知」、「楽しさの感情」、「能力獲得への積極性」と、「能力獲得への目的性」を設定し、調査のための質問紙を作成した。</p>
	<p>設定した指標に基づき、各能力の評価を試行する</p>	<p>WSAテストの試行 被験者は大学生4名。問題は、「意見主張型」と「反論型」の2種類を用意。それぞれ解答した後、受験して気づいたことについてインタビューした。その結果、以下のことが確認された。(「」以下は、試行に基づいて変更した部分)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) テストとして成り立つこと。(生徒全員に実施した) 2) ライティングでは語数の目安が示された方が答えやすいこと。(語数を明記した) 3) スピーキングではメモなどを見ずに話すほうが答えやすいこと。(教示に明記した) 4) テストそのものが刺激となって、「書く」、「話す」が家庭学習でとくに重視され始める可能性があること。(次年度での検証課題とした) 5) 流暢に「書く」、「話す」に関して障壁となるものは何か不明であること。(WSA能力テストのとき、生徒の内省を収集して検討した) <p>テスト型については、「意見主張型」を採用した。理由は、縦断的・横断的に比較できるよう、全学年に共通して使用する必要があるため、より単純な設問の方が適していると考えられること、及び、発信型の能力に特化して測定する方が妥当と考えられることである。</p>
<p>評価指標および評価方法の妥当性と信頼性を検証する</p>	<p>次年度への展望を検討する</p>	<p>WSAテストと英語学習リサーチの実施 研究対象の生徒すべて(国際コース1・2・3年)に対し、1・2年生は、11月と1月、3年生は10月と12月のそれぞれ2回実施した。…[資料3] WSAテスト:スピーキングの「流暢さ」、45.5wpm(10月) 51.6wpm(12月)。その他、ライティングの「流暢さ」、スピーキングの「正確さ(発音)」が上がり、スピーキングの「内容の適切さ」が下がった(3年生)。 変化の推定要因:指導の効果(とくに、2分間弁論の繰り返し練習)、テストに対する練習効果(テスト慣れ)、スピーキングやライティングが評価されることの認識・意識による変容。 「書く」、「話す」の障壁:「言語の運用・知識(ライティング25%、スピーキング32%)」、「意見の構成力(ライティング29%、スピーキング23%)」、「単なる練習不足(ライティング28%、スピーキング21%)」、「恥ずかしさ・焦り(ライティング2%、スピーキング19%)」。どの部分に壁があるのか。個人差の把握と個人差に応じた指導の方途を考える必要。…[資料4] 英語学習リサーチ:「有用性の認知」、「能力獲得への積極性」ではすべての項目で肯定率が80%以上。とくに「楽しさの感情」では、「話す」において高学年ほど肯定率が低くなった。</p> <p>本校で作成したコミュニケーション能力の指標を、指導のフェーズごとに測定・評価し、指導の内容・方法と、コミュニケーション能力の変動との関係性を捉える。</p>
<p>(4)指導評価シラバスの開発</p>	<p>「総合的評価規準」を作成する 「科目ごと評価規準」を作成する</p>	<p>卒業時点、2学年次、1学年次の「総合的な評価規準」を作成した。</p> <p>上記(4)の「」に基づいて、「科目ごとの評価規準」の作成をした。 「科目ごとの評価規準」を取り入れた年間の指導・評価シラバスを完成した。</p>

第二年度

研究内容	研究方法	成果
<p>(1)ライティングからスピーキングへの移行を図る指導法の研究</p>	<p>主に1・2年生を対象として、指導計画に基づく指導を実践する</p>	<p>研究開発の第1年次の結果に基づく反省点、「ステップアップ・プログラム」の内容を「イベント型」と「トレーニング型」に分けて再構築するとともにシラバスに位置づけて指導するを考慮して、「ステップアップ・プログラムの概念図(第2案)」を再構築し、「新しいシラバスの作成(英語関連20科目分)」と「新しいシラバスに基づく授業の実践」を行った。</p>
		<p>「ステップアップ・プログラム」の第2案では、1年生をインプット重視の「形成期(formation)」、2年生を創造・産出重視の「創造期(creation)」と概念的に位置づけて、シラバスの作成と指導を行った。</p> <p>「形成期」のインプットに関しては、広島市立大学の青木信之教授、渡辺智恵助教授による個人学習用コンピュータソフト、「ぎゅっとe」のリスニング800問について、シラバスに位置づけて指導した。</p>
<p>学期ごとに、各能力の測定・評価をする</p>	<p>議論のための発信能力の総合評価:「話す」・「書く」の論証能力を測定するための WSA テストは、平成16年度2学期、3学期、平成17年度4月(診断評価)、7月(形成評価)、12月(事後評価)の5回の実施をした。</p> <p>科目ごとの測定評価: 研究対象科目(12科目)について、授業担当者(15名)が、学習状況の観察、定期考査、小テスト、課題、ポートフォリオ、ならびに「公開研究授業」での指摘に基づいて、「気づき」「工夫」「反省点」を挙げた「ステップアップ・レポート」を作成している。</p>	

公開研究授業
『舟入高等学校 SELHi 研究開発成果中間報告会』平成17年10月28日(金)の研究授業「科目」と(担当教諭): 「オーラル」(川本由美・クレイグ=ネヴィット・ナタリー=ヤンチャムナム)、「英語」(栗原誠・住田恒三)、「総合英語」(大鴻淳二)、「英語」(佐々木百合子・佐藤将記・近藤あゆみ)、「英語表現」(佐藤将記・クレイグ=ネヴィット・ナタリー=ヤンチャムナム)、「異文化理解」(堂鼻康晴)、「リーディング」(為西正和・栗栖五代)、「コミュニケーション」(横山直子・西巖弘)。



測定・評価の結果に基づき、指導法の適否を検討する

今年度(研究第二年次)は、3回の測定を行った。したがって、1回(4月)と2回(7月)の間を第1指導フェーズ、2回(7月)と3回(12月)の間を第2指導フェーズとして、指導の効果を検討する予定である。最終的には、3度の測定結果を分散分析して指導内容・方法との対応関係を記述するが、今回の報告では、結果の把握を容易にするため、1回と3回の従属変数ごとの平均値の差の有意性に基づいて記述する。

WSAテストに基づく適否の検討

スピーキング能力: 学年ごとの平均値について、本年度4月と12月を比較すると、スピーキングの「流暢さ(WPM)」は、1年(42.8 28.8, p<.001)で向上した。また、「適切さ(ALTとJTLによる評価30点満点)」は、2年(12.1 10.3, p<.05)で向上した。「正確さ」の有意な変動はなかった。
 ライティング能力: 学年ごとの平均値について、本年度4月と12月を比較すると、ライティングの「流暢さ(WPM)」は、1年(6.7 4.4, p<.001)で向上がみられた。「適切さ(ALTとJTLによる評価30点満点)」は、2年(14.9 12.9, p<.05)での向上がみられた。「正確さ」の有意な変動はなかった。
 総合指数: 能力を総合的に捉えるため、スピーキングとライティングの総合指数を新たに以下のように設定したところ、2年生のライティング(6.7 5.4, p<.1)において、向上の傾向が示された。

スピーキングの「総合指数」 = WPM × (1-誤発音率) × (1-誤文法率) × (適切さ/20)
 ライティングの「総合指数」 = WPM × (1-誤綴率) × (1-誤文法率) × (適切さ/20)

表 WSAテストの各指標の学年・時期ごとの平均値と時期差のt値の生起率

	スキル	ライティング						スピーキング				
		指標	流暢さ		正確さ		適切さ	総合指数	流暢さ	正確さ	適切さ	
	数値化	a*(1-b)*(1-c)*(d/20)		a. WPM	語/文	b. 誤綴率	c. 誤文法率	d. 論拠評価	e*(1-f)*(1-g)*(h/20)	e. WPM	f. 誤発音率	g. 誤文法率
学年(時期)ごとの平均値	1年(4月)	1.8	4.4	9.1	1.2%	8.2%	7.3	11.4	28.8	0.4%	8.9%	6.8
	1年(12月)	2.3	6.7	9.6	0.9%	9.2%	7.2	17.1	42.8	0.8%	8.9%	7.8
	2年(4月)	5.4	8.7	10.6	1.0%	8.5%	12.9	29.2	57.7	0.4%	6.7%	10.3
	2年(12月)	6.7	9.6	10.4	0.8%	8.8%	14.9	36.1	60.2	0.7%	6.6%	12.1
	3年(4月)	8.7	11.7	12.1	0.9%	6.7%	15.4	35.2	66.4	0.3%	4.6%	10.9
	3年(12月)	9.5	13.1	12.3	1.2%	6.3%	15.2	66.6	93.3	0.8%	4.4%	14.5
4月と12月の平均値の差の生起率(テストによる)	1年	.32	.00	.35	.39	.25	.86	.11	.00	.11	.99	.20
	2年	.06	.13	.76	.38	.76	.03	.15	.49	.16	.96	.04
	3年	.36	.02	.61	.19	.48	.89	.00	.00	.02	.64	.00

上記(1)の結果に基づいて、指導計画の修正と精緻化をする

ユーロスコラとは・・・アジア諸国の代表として、『ユーロ会議』(平成17年5月、フランスで開催)に、国際コミュニケーションコース2年生40名が参加し、人類最初の被爆地であるヒロシマの惨状を英語とフランス語で約2000人の世界各国の参加者に対し、スピーチとプレゼンテーションを行った。

- 形成(FORMATION)期の指導 - 「言語」の形成と伸長にさらなる配慮が必要 -
 ライティング・・・イベント型は「ジャーナル・ライティング」と「スピーチコンテスト」、トレーニング型は「エッセイ・ライティング」、「英文法演習」などの活動・指導により、「流暢さ」が向上した。「流暢さ」を高める指導の継続と「正確さ」、「適切さ」を高めるための指導の改善をする
- スピーキング・・・イベント型は「国際交流キャンプ」、トレーニング型は「ぎゅっとeリスニング」、「音読」、「1分間モノログ」、「2分間モノログ」、「即興スピーチ」などの活動・指導により、「流暢さ」が向上した。「流暢さ」を高める指導の継続と「正確さ」、「適切さ」を高めるための指導の改善をする
- 創造(CREATION)期の指導 - 「思考」の養成を土台とした洗練が必要 -
 ライティング・・・イベント型は「ユーロスコラ」、「エッセイ・ライティング」、「アカデミック・ライティング」、「パブリック・スピーチ」、「プレゼンテーション」、トレーニング型は「エッセイ・ライティング」などの活動・指導により、総合的に向上した。とりわけ「適切さ」での向上がみられた。「適切さ」を高める指導の継続と「流暢さ」、「正確さ」を高めるための指導の改善をする
- スピーキング・・・イベント型は「発音クリニック」、「グループ・ディスカッション」、トレーニング型は「ぎゅっとeリスニング」、「2分間モノログ」、「即興スピーチ」、「音読・暗誦」などの指導・活動により、「適切さ」が向上した。「適切さ」を高める指導の継続と「流暢さ」、「正確さ」を高めるための指導の改善をする
- 目標値の達成度
 ステップアッププログラム(第2案)の目標値(「流暢さ」1年生 60WPM、2年生 70WPM)は、平均値に基づく達成していない。目標値の見直し・適正化と指導法全体の合理化を図る
- 次年度に向けて
 ライティングからスピーキングへの般化、『2つのスキルの相乗効果』を意図して、ステップアップ・プログラムの洗練を図る

(2)スピーキングから議論活動への移行を図る指導法の研究	主に3年生を対象として、指導計画に基づく指導を実践する	上記、第2年次(1)の と共通。 さらに「ステップアップ・プログラム」の第2案では、3年生を即興的なアウトプット重視の「加速期(acceleration)」と概念的に位置づけてシラバスの作成と指導を行った。
	学期ごとに、各能力の測定・評価をする	上記、第2年次(1)の と共通。
	測定・評価の結果に基づき、指導法の適否を検討する	<p>WSA テストに基づく適否の検討</p> <p>スピーキング能力:学年ごとの平均値について、本年度4月と11月を比較すると、スピーキングの「流暢さ(WPM)」は3年(93.3 66.4, $p<.001$)と確実に向上している。よって、卒業時の目標値75WPMを大幅に超えた。「適切さ(ALTとJTLによる評価30点満点)」は、3年(14.5点 10.9点, $p<.001$)で向上した。</p> <p>× スピーキングの「正確さ(発音エラー率)」は、3年(0.8% 0.3%, $p<.05$)で下降した。</p> <p>ライティング能力:学年ごとの平均値について、本年度4月と11月を比較すると、ライティングの「流暢さ(WPM)」は3年(13.1 11.7, $p<.05$)と向上した。</p> <p>総合指数:能力を総合的に捉えるため、スピーキングとライティングの総合指数を新たに(1)の のように設定した。3年生のスピーキング(66.6 35.2, $p<.001$)での向上が示された。</p>
	上記(2)の の結果に基づいて、指導計画の修正と精緻化をする	<p>加速(ACCELERATION)期の指導 - 「言語」と「思考」のバランスのとれた加速が必要 -</p> <ul style="list-style-type: none"> ライティング・・・イベント型は「ライティング・レポート」、「パブリック・スピーチ」、「プレゼンテーション」、トレーニング型は「5分間ライティング」などの活動・指導により、「流暢さ」が向上した。「流暢さ」を高める指導の継続と「正確さ」、「適切さ」を高めるための指導の改善をする スピーキング・・・イベント型は「グループ・ディスカッション」、「トーキング・マッチ」、「ディベート」、トレーニング型は「ぎゅっとeリスニング」、「音読・暗誦」、「1分間モノログ」、「2分間モノログ」などの活動・指導により、総合的に向上した。とりわけ「流暢さ」と「適切さ」での向上がみられた。一方、<u>正確さは下降した。</u>「流暢さ」、「適切さ」を高める指導の継続と「正確さ」を高めるための指導の改善をする <p>目標値の達成度</p> <ul style="list-style-type: none"> ステップアッププログラム(第2案)の目標値(「流暢さ」3年生 75WPM)は、平均値に基づく<u>確実に達成することができた。</u>しかし、100%の生徒がこのラインを超えたわけではなく、未達成の生徒は3年生41名のうち5名(12.2%)である。<u>個人差への対応と指導法全体の合理化を図る</u> <p>次年度に向けて</p> <ul style="list-style-type: none"> 「形成期の言語」、「創造期の思考」を基盤として、「加速期」には「流暢さの醸成」を中心として指導することを通して、「議論するための発信能力」を総合的に高めることができるよう指導プロセスの意義づけと精緻化を図る。 「流暢さ」は「量的な」指標であり、「適切さ」と「正確さ」は「質的な」指標といえる。この「量」と「質」のトレードオフ関係を考慮して、指導プロセスの改善を図る。
(3)指導評価シラバスの開発	評価規準(総合的・科目ごと)に基づく教師による指導と生徒による自己評価を実践する	科目ごとに「新しいシラバス」に基づく指導と評価を行った。 とくにスピーキングとライティングに関しては、ポートフォリオを用いて毎回のパフォーマンスの変化を追跡するなど、自己評価を教師と生徒で共有し、向上の目標を明確にするよう努めた。
	上記(3)の の基づいて、科目ごとのシラバスの目標への適合度を検証・検討する	授業科目ごとに『ステップアップ・レポート』を作成し、「気づき」「工夫」「反省点」などの記録内容、ならびに『公開研究授業』のまとめに基づいて、運営指導会議ならびに科目担当者会議(13名)で協議し、シラバスの適合度を検討した。
	上記(3)の の基づいて、シラバスと評価規準の改善をする	シラバスと評価規準の改訂をし、改善を図った。 【資料掲載アドレス】 http://www.funairi-h.edu.city.hiroshima.jp/Frameset.htm